

教会暦で言えば、私たちは復活の主イエスの力強い導きの下で、4月からの新年度の歩みを始めています。教会に聖霊が注がれるペンテコステまでの間、28章16節以下にあるように、復活したイエスは『わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子としなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる』(18～20節)という派遣命令の言葉を弟子たちにかけて、イエスの生涯を描くマタイ福音書は終わりを告げます。

マタイ福音書の最後にある、復活のイエスのこの言葉は、復活直後に限定されずに、今日に至るまで、主イエスを信じる信仰者すべてに呼びかけられている言葉でもあります。ルカ福音書では、十字架刑死の場から逃げていた2人の弟子たちがエマオで復活者イエスに劇的に出会って、彼らはエルサレムに戻って、そこで弟子たちは力づけられて復活の証人になってこの世へと遣わされて行きます。

ルカ福音書の記述と比べると、マタイ福音書では弟子たちがガリラヤで出会ったことが17節で簡潔に伝えられているだけです。『イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた』と書いてあるだけです。復活したイエスに出会っても、疑う者がいたことが隠されることなく書かれていて、使徒としての力強く宣教に出かけていく弟子たちの姿が何も描かれていません。ここでユダを除いた11弟子たちが復活のイエスに出会っても、なお疑いを持っているのは、イエスが逮捕され、十字架にかけられることになったとき、自分たちが主イエスを見捨てて逃げてしまったことが心の重荷になっていて、素直に復活したイエスと向き合うことができなかったからでしょう。

この最後のイエスの派遣命令には2つの重要な言葉が示されています。まず、「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」という言葉と、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という言葉です。この2つの言葉は結びついて弟子たちには理解されたと思われます。つまり、この世界のすべての事柄について決定する権限を復活したイエスが神から与えられている。だから、出かけて行って、すべての民を弟子としなさい。そのために、父なる神と、子なるキリストと、聖霊の名によって洗礼を授け、生前の主イエスが教えていたことをすべて守りながら生きていくようにしなさい。そのことによって、復活したイエス・キリストはいつもあなたがたと共にいるようになるというわけです。

復活したイエスが世の終わりまでいつもあなたがたと一緒にいるという言葉は、弟子たちにとって自分たちの裏切りが赦されたと理解されたに違いないのです。そして、

すべての民を弟子にするような新しい使命は、赦された者にとって、新しく生きる力を与えられたという気持ちに至らせたに違いないのです。

この全き赦しと、新しく与えられた生きる上での目標が弟子たちに勇気を与えたことは間違いありません。そして、実際に復活したイエスに出会った弟子たちは、生前にイエスの教えをあれこれ見聞きしていたので、生前のイエスのことを新しく弟子になった者たちに語り伝えることができたのですが、そういった第一世代の弟子たちが死んでいく中で、生前のイエスの立ち居振る舞いを福音書というかたちで残す必要性が生まれたのでした。

「赦された者として生きる」というキリスト教信仰の根幹の教理が2000年間の歴史を通して、現代の私たちに伝えられているのです。「すべての民をわたしの弟子にする」ということは、この世で孤立して生きている人に対して、あなたを主が弟子として呼んでそばに招き、共にいるということです。弟子として招かれているということとを告げ知らせることが、「あなたは赦されて生きている」という信仰者にとってのこの世での使命なのです。

私たちは一個の人間としては、弱いだけでなく、脆い存在です。それを保証するのがこの世では家族であるのですが、なかなか家族が家族の一員である人間を支えることができない場合があります。ところが、主イエスを受け入れて赦されて生きる歩みに召しだされた者は、主イエスの名を信じる者となるのです。それはキリストの支配の下に組み入れられて、立たせられたことを意味します。それは、この世で孤独であった者が「神の子となる」という、決定的な秩序の変化が起こっているのです。

ただ、それは人の目を引くような見栄えの良い変化ではありません。見栄えと言う点からいえば、この世の子らの方がはるかに魅力的に見えるかもしれません。門地、家柄、地位、財産など、人間の生を支えると思えるさまざまな資格を、この世の子らは誇りにして飾り立てて、見栄えの良い生き方を追求してやまないからです。

しかし、主イエスの名を信じ、神の子となることで弟子となつて生きていくということは、この世での価値基準を捨て去ることにもつながっていきます。弟子として生きていくことを決断した者は『わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる』という主イエスの言葉に支えられながら、この世で生きていくとき、自らの「弱さ」に翻弄されるが起ります。それでも、『いつもあなたがたと共にいる』という主イエスの約束の言葉ゆえに、この世で直面する自らの「弱さ」にもキリストの力が宿っていることを知ります。この恵みのゆえに、「弱さ」を誇りとし、「弱さ」ゆえにキリストの恵みを誇りとして弟子として歩んでいくわたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのです。